

東日本大震災で起きたことに向き合う通年講座「311 伝える／備える」の第11回講座が、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスで16日あ

### 第11回講座

つた。復興期を扱う第3フェーズの初回で、テーマは「なりわい再生」。宮城県南三陸町の水産加工

会社「行場商店」社長の高橋正宜さん(56)、同県巨理町の雑貨製造販売「WATALIS(ワタリス)」代表の引地恵さん(49)の証言と訴えに耳を傾けた。

行場商店社長

高橋 正宜さん(56)

## 311 伝える／備える 次世代塾

### 早期再開で販路維持

震災の津波で志津川湾に2工場が全壊した。総額10億円近い被害を受けたが、長男の言葉に後押しされて事業継続を決めた。震災の約2週間後、「9月の秋サケ漁までには絶対再開する」と従業員に宣言し、通勤圏内への避難を要請した。

8月に第1工場、翌年5

月には新築した第2工場でも操業再開にこぎ着け、販路を維持することができた。操業停止が長引けば取引先を失う。何としても早く再開したかった。

大規模被災し、自分自身どうするかを考えたのが全ての出発点。地震直後、「車は諦める」「社に戻るな」と呼び掛けたのに応じて高台避難した従業員70人が全員無事だったのに加え、企業地震保険とグループ化補助金にも支えられた。

補助金には救われたが、地震は高い確率で起きると言われていた。南海トラフ巨大地震も想定される中、被災前から再生支援の枠組みを考えておくべきだ。

### 受講生の声

#### 保険の役割確認

保険会社でインターン(就業体験)をした経験もあり、地震保険に加入していたことが被災後の企業再建の大きな力になったとの証言が心に残りました。掛け金は負担でも、いざという時に救われることを再確認しました。

(仙台市太白区・東北福祉大3年・21歳)



菅野 京さん

#### 地域貢献に共感

講師2人に共通していたのは、自社の利益を追求するだけでなく、地元を盛り上げようという姿勢。高齢化や過疎化が進む東北に重要なマインドであり、自分が目指す教育現場からも広めたいと思いました。

(仙台市若林区・東北大学院修士1年・23歳)



植杉亮介さん

#### 心意気伝えたい

「地元を誇れる職場をつくる」という引地さんの取り組みに感銘を受けました。夢は古里の新庄市で教員になること。子どもたちには震災の被災の側面だけでなく、こうした地元の人たちの心意気も伝えていきたいです。

(仙台市太白区・宮城教育大3年・21歳)



伊藤理子さん

WATALIS(ワタリス)代表 引地 恵さん(49)

### 被災地に魅力と誇り

震災後、巨理町の学芸員として地元農家を調査中に巾着袋に出合った。聞けば着物の残り布で仕立てた袋に米を入れ、世話になった人に渡すという。養蚕と米作が盛んな町らしい故郷の返礼文化に感動した。

これをヒントに妹ら2人と古い着物で袋を作り、販売を始めた。町の半分が津波をかぶった地元で女性が働ける職場は少ない。被災者の孤立防止にもなると、仲間を増やしてきた。

被災地だから買ってもらえるように一層努めたい。

今は縫い手10人、運営スタッフ6人。中には津波で家を失った人も2人いる。不便な田舎でも、魅力的な職場があれば郷土を誇る気持ちにつながる。と信じている。

ビジネスはきれいごとばかりではないが、地方に生きるプライドを持てる職場になるように一層努めたい。

メモ 「次世代塾」は、河北新報社などが震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指して企画した年15回の無料講座。次回は来年1月20日。連絡先は同社防災・教育室＝メールjisedai@po.kahoku.co.jp

運営する311次世代塾推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構



津波被災した直後の「行場商店」第1工場(上)と2012年5月に新築された第2工場(下) 宮城県南三陸町志津川